



東日本学園大学の創立者 渡邊 享 先生



歯科医師過少の要請を受けて昭和40年代後半、私立の伝統校が第二歯学部をつくる動きが相次いだ。本学も、東京とは異なる地方都市に増設を検討した。静岡市、札幌市、新潟市が候補に挙がったが、いち早く用地の目処が立ったのが新潟市であった。

昭和50年代中頃、私は、本学30回卒の庄内宗夫先生（北海道歯科医師会長）に札幌郊外へ案内された。美しい林のひろがる緑地帯を指して、先生は「ここが予定地だったんですよ」と教えた。

そのときの私は、ここに本学第二歯学部ができていたら、渡邊先生が札幌に東日本学園大学を興すことはなかったろう、としばし感慨にふけた。…幻の札幌歯学部。

32回卒・札幌市開業の渡邊 享（うくる）は、新潟歯学部の開校した昭和47年（1972）の7月、設計事務所長を伴って、札幌から1時間ほどの当別町の土地を下見した。

ついで、新日本観光興業社長の佐々木眞太郎を訪ね、医療過疎といわれた北海道に医療系大学を設置したいと、その構想を熱っぽく説き、スポンサーとして創設資金の拠出をおおいだ。当時、道内には北大1校であったから、彼の構想には説得力があったろう。

さらに、9月に北海道知事の堂垣内尚弘を訪問

し、その気迫をもって学園設置の協力を取りつけた。翌10月には、札幌富士ビルのワタナベ歯科診療所内に設立準備室を置き、大学開校に邁進する。本学学長の中原 實も、創立理事に名を列ねた。

翌48年4月に文部省に歯学部設置の認可申請（第一次審査）、6月薬学部設置の認可申請を提出した。渡邊の起意から2年足らずの49年（1974）4月、東日本学園大学（のちに北海道医療大学に改称）は、渡邊 享 を理事長、大野精七を学長として、薬学部を開設した。

東日本学園大学の校名は、堂垣内知事が命名したと聞く。52年の第二次審査をへて、歯学部は53年4月に増設された。

渡邊は、初代理事長として59年1月までつとめたが、非情にも病いに倒れ、60年6月16日に68歳で逝去した。理事長在任10年であったが、ひとり医療系大学を起意し、豪胆に一步を踏みだしたのは、紛れもなく渡邊 享 である。

かつて、渡邊先生を中に数人の校友とススキノに遊んだ。そのとき先生は、「歯学部は二次の審査なので、薬学部が先になってしまったんですよ」と微笑んだ。私は今も、その穏やかながら毅然とした品格を忘れない。

（写真・渡邊 享 先生）